

資料

小児看護学教育の実践方法と今後の課題についての文献検討

The Practice and Issues of Pediatric Nursing Education :
A Literature Review

池田友美¹ Tomomi Ikeda, 亀田直子² Naoko Kameda,
鎌田佳奈美¹ Kanami Kamata

要 旨 本研究の目的は、小児看護学教育に関する先行研究を概観することで、小児看護学教育の実践内容と方法を明らかにし、今後の課題について検討することである。31件の文献を分析対象とした。小児看護学教育の実践としては、能動的な授業の構築や模擬患者やシミュレーションを使用した演習、臨地実習での倫理教育、小児看護の現状に応じた実習場所の選択等が行われていた。今後は、講義・演習・実習を一連とした教育への取り組み、実践能力を向上させるための教育方法の工夫、多様化する実習施設に対応する方策等の検討およびそれらの教育内容を客観的に評価する方法の構築が課題である。

キーワード 小児看護学、教育、授業、演習、実習

I. はじめに

複雑で多様化する国民のニーズや医療を取り巻く環境の変化から、看護職の役割は増大してきており、問題解決能力や実践能力を兼ね備えた看護師の養成が求められている。特に小児看護学においては、対象が成長発達途上にある子どもとその家族であるため、発達段階にあわせた子どもの思いや状況を理解すること、また子どもの最善の利益を考え、子どもと家族が自己決定できるよう援助する事など、より専門的な知識と実践能力を要する。

しかし、小児看護学の基礎教育においては、年少人口の減少に伴い、子どもとの接触体験が少ない学生の増加により子どものイメージ化が難しいこと、入院期間の短縮化に伴う小児病棟の減少等、社会の人口構造の変化や制限された教育環境により、教育的効果を得にくい状況にある。

そこで、様々な制限がある中でも、小児看護学領域の問題解決能力や実践能力を高めるための教育方法について検討が必要であると考え、文献検討を行った。

II. 目的

小児看護学教育に関する先行研究を概観することで、小児看護学教育の実践内容と方法を明らかにし、今後の課題について検討する。

III. 方法

1. 文献の収集方法

小児看護学教育に関する文献を収集した。文献検索に用いたデータベースは、医学中央雑誌Web版、PubMedであり、キーワードは「小児看護学」「教

*1 摂南大学看護学部 Faculty of Nursing, Setsunan University

*2 元クリニック看護師 Former Clinic Nurse

育」「大学教育」「実習」「undergraduate」「baccalaureate」「pediatric nursing」で単独もしくは組み合わせ用い、2007年以降2012年4月までに発表された原著論文を検索した。

2. 検討方法

得られた文献を小児看護学教育の評価方法、小児看護学の講義、小児看護学の演習、小児看護学の実習に分類、整理し、小児看護学教育の実践方法と今後の課題について分析した。

IV. 結果

文献は31件、その内、国外文献は6件であった(表1)。

1. 小児看護学教育の評価方法について

国外文献の質問紙調査では、対象群を設けて量的に評価し、シナリオを用いた模擬演習であるシミュレーション教育が有効な学習形式であると報告していた(Cardozaら, 2012; Ganttら, 2010; Kaplanら, 2011; LeFloreら, 2012; Parkerら, 2011)。一方、本邦における教育の評価方法は、平元ら(2007)が演習の場面設定の有無で学生の演習の効果を評価していた研究以外は、比較する対象を設定しない学生の自己評価やレポート、満足度や技術達成度を測る自作のアンケートを評価対象とする研究であった。特に、講義の評価に関する研究は散見される程度であった(岩田ら, 2010; 富崎ら, 2008)。また、講義・演習・実習を通して評価した論文は見当たらなかった。

2. 小児看護学の講義について

飯村ら(1998)は、1998年に看護系大学46校に小児看護カリキュラムの課題についての全国調査を実施している。小児看護学では、対象の理解や援助技術の獲得のみならず、専門職として自ら学ぶ姿勢を育み、問題分析し課題につなげることが学習目標としてあがった。しかしながら、従来から行われてき

た講義は、教員からの一方的な知識の提供であり、学生は必ずと受身の姿勢になりやすい。問題解決能力や実践能力を育成するためには、知識を単に伝達するだけでなく、「知識を使える」学生を育成していく必要がある。

溝上(2010)は、「知識を使える人材をめざし、アクティブ・ラーニングに取り組むことが重要」と強調している。「アクティブ・ラーニング」とは「能動的な学習」のことで、課題研究やディスカッション、プレゼンテーションなど、学生の能動的な学習を取り込んだ授業である。このような学習方法は、成人教育理論に基づくもので、子どもが学ぶ初等教育や中等教育とは違い、自分自身の学習について計画化・実行・評価に責任をもつ自己決定型学習である(松浦, 2012)。小児看護学におけるアクティブ・ラーニングの実際について試みる。上山(2008)は事例の提示を行い、「子どもの育成に関する社会資源について」グループワークによる探究、討議、発表を行わせた。また、長尾ら(2008)も実際のベッド周囲の環境を観察させた後に、「発達段階に応じた子どもの事故の特徴について」グループワークを実施している。いずれも、学生からは関心、理解度、自主性において肯定的な回答を得、能動的学習の効果が明らかになった。

江村(2007)は、IBL(Inquiry Based Learning)の教育哲学に基づき、事例の提示、チューターからの支持、グループワークでの学習を行い、その評価のため学生への面接調査を行っている。その結果、学生はチューターの支持を得ながら探究のプロセスを辿っていたことが明らかになり、知識を与えるのではなく、学ぶ姿勢を引き出すチューターとしての教員の役割が重要であることを示した。富崎ら(2008)は小児の事例を用いてPBL(Problem Based Learning)チュートリアルを導入した評価を報告している。教員が事前に作成した学習目標に対して、学生が学習の自己評価を実施した結果、学習意欲を高めたことを報告している。また、Matsui(2010)も学生に対し、動機づけモデルをもとに6つの項目について調査を行い、PBLチュートリ

表1 分析対象とした文献一覧

【小児看護学における講義に関する文献】				
著者	論題	出典	調査方法	結果
岩田ら	PBLチュートリアル授業を用いた小児看護学の授業評価プログラム変更の影響に関する考察—	日本看護学会論文集, 小児看護, 40, 180-182, 2010.	量的研究 : 質問紙調査	86人からの調査の結果、平均点で最も高値を示したのは、「一斉授業より知識が身に付く」「一斉授業より疾患理解に役立つ」や「1年次より報告ができる」「1年次より話し合いができる」であった。能動的な活動が理解につながり、学年進行に従い成長を自覚していた。
富崎ら	小児看護学におけるPBLチュートリアル学習の検一喘息事例の学習目標自己評価からみた授業評価—	日本看護学会論文集, 小児看護, 39, 218-220, 2008.	量的研究 : 授業後の自己評価表の分析	喘息事例について、PBLを実施した学生28名の自己評価表とポートフォリオの内容および教員による評価内容を分析した。病態生理の理解が深まり、興味が高まったとの記述があったが、グループによって自己評価に差があり、事例を深めるためにはチューターの役割が重要であることが明らかになった。
上山	小児看護学の教育方法に関する研究(第3報)—社会資源の単元における学生の関心を高める授業展開—	新見効率短期大学紀要, 29, 33-37, 2008.	質的研究 : 質問紙調査	子どもの育成に関する社会資源について講義を行ったあと、グループワークを実施し、子どもの社会資源について、保健・医療・福祉・教育の観点からその社会資源を探求し、関連する法律とともに発表させた。2回目は具体的事例を提示し、グループで必要な社会資源について討議させた。終了後に61名の学生に対し、質問紙を配布し調査を行った結果、自主性や積極性、社会資源の理解度、関心など8割が肯定的意見であった。
長尾ら	小児の発達段階に応じた事故の特徴を理解するための授業方法—シミュレーション教材を用いて—	日本看護学会論文集, 小児看護, 38, 182-184, 2008.	質的研究: グループ発表内容	ベッド内や床頭台にはさみや玩具、毛布を点滴中のモデル人形とともに配置し、起こりやすい事故についてグループワーク、発表会を実施した。学生81名に学びのレポートと質問紙調査を行い、子どもの事故の特徴と事故防止について95%が理解が深まったと回答した。
江村	小児看護学の授業におけるIBL (Inquiry Based Learning) 導入の意義と課題	日本看護学会論文集, 小児看護, 37, 98-100, 2007.	質的研究 : 面接調査	IBL実施後、学生76人に対し、ワークをどのようにとらえているかについて、インタビュー調査を実施した。その結果【探究のプロセス】【グループワーク】【チューターの指導】【個人学習】【事例提示】とIBLの一連の過程が抽出された。
Matsui	A program evaluation of PBL tutorial	The Niigata Journal of Health and Welfare, 9(1), 33-39, 2010.	量的研究 : 質問紙調査	PBL学習実施後、28名の学生を対象に質問紙調査を実施した。学習目標の評価と学生動機づけモデルの6項目中、interesting, engaging, valuableで有意に高まったことが明らかになった。
【小児看護学における演習に関する文献】				
Cardozaら	Comparative study of baccalaureate nursing student self-efficacy before and after simulation	Comput Inform Nurs, 30(3), 142-147, 2012.	量的研究: 質問紙調査	52名の学士課程の学生を対象にシミュレーション教育の効果を測定した。シミュレーション教育は、従来の学習の境界を拡大する機会を供給し、学生の経験を豊かにすることが明らかになった。
Ganttら	Using the clark simulation evaluation rubric with associate degree and baccalaureate nursing students	Nurs Educ Perspect, 31(2), 101-105, 2010.	量的研究: 質問紙調査	69人の準学士課程と109人の学士課程の学生を対象にClark Simulation Evaluation Rubricを用いて評価した。Clark Simulation Evaluation Rubricは、スキルのチェックリストの有無にかかわらず使用することができる実用的なツールであることが判明した。
Kaplanら	Design and implementation of an interdisciplinary pediatric mock code for undergraduate and graduate nursing Students	Comput Inform Nurs, 9, 531-538, 2011.	量的研究: 質問紙調査	学部学生43名と12名のEmergency nurse practitioner (ENP)を対象に小児科の模擬のコード・シミュレーションを利用し評価した。学際的小児科の模擬のコード・シミュレーションの利用は、医学研究所およびThe American Association of Colleges of Nursing (AACN)によって述べられたコアコンピタンスを組込むために有効な方法であった。
LeFloraら	Can a virtual patient trainer teach student nurses how to save lives—teaching nursing students about pediatric respiratory diseases	Simul Healthc, 7(1), 10-17, 2012.	量的研究: 質問紙調査	93名の学士課程の学生を対象に、Virtual Patient Trainerの効果を明らかにした。Virtual Patient Trainerは、従来の講義形式を使用して学習効果を達成するために効果的な代替品であることが示唆された。
Parkerら	Pediatric clinical simulation: a pilot project	J Nurs Educ, 50(2), 105-111, 2011.	量的研究: 質問紙調査	41名の学士課程の学生を対象にシミュレーションの学習成果について調査した。臨床の実習科目はシミュレーションの経験により改良されることが示唆されたが、さまざま教育課程、教育内容による検証の蓄積が必要である。
平元ら	小児の採尿技術に関する指導方法の検討 改良型採尿モデルおよび場面設定の有効性について	秋田大学医学部保健学紀要, 15(1), 44-50, 2007.	量的研究: 質問紙調査	乳幼児の採尿に関する効果的な演習方法を検討するために、演習方法で67名の学生を2群に分けて評価を行った。教員による詳しい場面を設定することにより、小児の発達段階に応じた対応の仕方を学習する機会として有効であった。
松井ら	学生の自主作成による小児看護学技術演習の効果 乳児・幼児モデルを用いた課題別演習の作成から評価の過程を通して	日本看護学会論文集, 小児看護, 39, 221-223, 2008.	質的研究: 「小児看護学演習のまとめ」を分析	学生自身が自主的に作成したロールプレイによる技術演習を行った。看護系大学3年生83名を対象に演習の効果を検討した結果、学生の主体的演習は「子どもの理解と対応」の「子どもの接し方」について特に学びが大きく、イメージ化だけでなく具体的な援助技術を獲得するために有効であった。
松井	小児看護学教育における技術演習の効果	新潟医療福祉学会誌, 9(2), 31-38, 2010.	量的研究: 質問紙調査	83名の看護大学3年生を対象に実習終了後に「実習後の技術達成度アンケート」を実施し、統計的に効果の立証を試みた。その結果、授業や演習で子どものイメージ化が図られ実習で「子どもとの接触」や「子どもや家族とのコミュニケーション」につながっていた。しかし、学生の技術の習得は、子どものイメージ化にとどまり、実践的な技術では「バイタルサイン測定」以外は期待された効果がなかった。
谷口ら	小児の与薬に関する技術演習での学生の学習効果	岐阜県立看護大学紀要, 10(2), 11-17, 2010.	質的研究: 学生のレポートを分析	学生自ら子どもの発達段階に応じた与薬に関する看護援助を考え、ロールプレイで発表し、討議する演習を行った。53名のレポートを分析した結果、具体的な看護援助の学びがあった。しかし、学生間のロールプレイでは子どものイメージが難しい課題もあった。
野口ら	小児看護技術教育の効果的な演習プログラムの検討—バイタルサイン測定場面のイメージ化をはかる—	日本小児看護学会誌, 16(2), 24-32, 2007.	量的研究: 学生の自己記述評価と教員の技術評価	技術演習プログラムを作成し、実習初日での実施を試みた。3年次66名を対象に分析した結果、バイタルサイン測定の技術の理解と習得、道具・環境の準備の必要性の理解、子どもの反応に合わせた測定方法・援助方法の選択必要性の理解は得られた。しかし、実際の子どもの対象とした場面での技術習得と状況対応能力の育成には課題が残る。

著者	論題	出典	調査方法	結果
兒玉ら	小児看護学における模擬患者を活用したコミュニケーション技術演習の検討	日本小児看護学会誌, 18(1), 79-84, 2009.	質的研究：学生の感想を分析	母親役の模擬患者を導入し、コミュニケーション技術演習を実施した。105名の感想を質的に分析した結果、一人ひとりが体験することで、コミュニケーションの難しさを再認識、フィードバックによる自分への気づき、緊張する体験、他の学生を注意深く見ることで学びがあった。反面、実習への不安、時間の問題、場面設定の問題が明らかになった。
【小児看護学における実習に関する文献】				
藤田ら	小児看護学実習における受け持ち児の家族と学生の心理的距離の変化	横浜看護学雑誌, 3(1), 32-38, 2010.	量的研究：質問紙調査	4年次学生55名の回答を分析し、受け持ち児の家族との心理的距離が変化した学生は39名(70.9%)であった。心理的距離が接近した学生は家族との関わり時間が長く、楽しく実習に取り組める傾向にあったこと、学生のポジティブな自己主張と受け持ち児の家族との心理的距離の変化に相関がみられたことを報告していた。
加藤ら	医中誌データベースを用いた看護専門領域別実習に関する研究動向の分析	日本看護学会論文集, 看護教育, 41, 138-141, 2010.	量的研究：テキストマイニング	1980年～2007年の「看護」「実習」「原著論文or会議録」の条件式により得られた8275文献のタイトルとキーワードを分析した。小児看護領域では「教員」が多く抽出され、学生が子どもの理解や家族との関係構築をするために教員のサポートを必要としていることが示唆された。
小代ら	小児看護学実習において看護学生が子どもとの人間関係の形成に向けて一歩踏み出すために影響する要因	日本小児看護学会誌, 18(2), 9-15, 2009.	質的研究：半構成的面接	学生9名の面接で得られたデータをKJ法により分析した。465の意味項目から6カテゴリ、32のサブカテゴリを抽出し、構造図にした。親との信頼感、医療者の助けやモデル提示による援護感が、学生を子どもとの関わり行動へと向かわせていた。学生がいつも見守られていると感じる実習環境の構築などの教育体制の検討が課題である。
糸井ら	保育園における小児看護学実習での学生の学習体験	目白大学健康看護学研究, 3, 81-87, 2010.	質的研究：学生のレポートを分析	学生26名の保育園実習での学びに関する90記述を分類し、23のサブカテゴリから5カテゴリを導き出した。成長発達の視点では十分に理解を深めていたが、子育て支援や家族への関わり視点へと、学びを拡大するための教育的支援の必要性が明らかとなった。
山下	臨地実習をとおして倫理を学ぶ：小児看護学における学生の体験事例を用いた試み	日本倫理学会誌, 2(1), 41-45, 2010.	実践報告：学生の記録用紙を分析	1グループ10名の3年次学生が、実習中に遭遇した倫理的問題事例を教員と学生との対話を行いながら、修正4ステップ問題解決モデルを用いて検討した実践報告である。このモデルは有用なツールであり、選択した行動を実際に行うことを学ぶことが今後の課題である。
丸山	看護学生が捉える入院中の子どもを尊重した関わり—小児看護学実習を経験した学生を対象に—	日本小児看護学会誌, 17(1), 65-71, 2008.	質的研究：質問紙と半構成的面接を分析	4年次学生9名のデータより抽出された子どもが尊重されている関わり21(8カテゴリ)、子どもが尊重されていない関わり9(3カテゴリ)、学生自身が子どもを尊重するために行った配慮17(9カテゴリ)を明らかにした。学生は関わりに対する子どもの反応に注目していたが、子どもの反応の読み取りに困難を感じている場合があり、その判断をサポートしていく必要があると提起していた。
今野ら	小児のプレパレーションに対する看護学生の認識—講義前・後・実習後の変化より—	日本小児看護学会誌, 20(1), 127-135, 2011.	量的研究：質問紙調査	2大学4専門学校にて、講義前、講義後、実習後に行った述べ641名の20項目のデータをMann-Whitney検定にて分析した。講義前・後では、10項目に有意差を認め、講義後にプレパレーション志向になっていた。実習経験により後退するプレパレーションの認識を再考できる学習機会を設ける必要があることを提言していた。
小迫ら	小児看護学実習における看護技術経験の現状と課題	山口県立大学看護栄養学部紀要, 創刊号, 28-38, 2008.	量的研究：「小児看護技術経験表」を分析	「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準」を改変した「小児看護技術経験表」40名を分析した。生活援助に関連する技術項目は十分に実施できていたが、症状管理や治療に関連した項目は患児の状態によって影響を受け、特に身体侵襲を伴う看護援助については、実施見学ともに機会がなかった項目が多かった。
高尾ら	小児看護学実習における実習指導の課題—対象の発達段階からみた看護技術経験の現状から—	日本看護学会論文集, 小児看護, 41, 214-217, 2010.	量的研究：「小児看護技術チェックリスト」を分析	学生360名の「小児看護技術チェックリスト」を受け持ち児を乳幼児群と学童群に分類し、各技術項目について経験レベル(「単独」「援助」「見学」)別に集計し、 χ^2 乗検定を行った。乳幼児を受け持つ方がより多く技術体験ができていたことが明らかとなり、小児看護技術の実施率は、受け持ち児の発達段階に影響することが示唆された。
松田ら	小児看護学実習における看護技術の経験率について—受け持ち患児の発達段階・健康ステージ分類からの検討—	目白大学健康科学研究, 3, 89-97, 2010.	量的研究：質問紙調査	77名の回答より、小児看護技術の経験率を受け持ち患児の年齢・発達段階別、急性・慢性疾患別に記述統計処理を行い、比較した。慢性疾患の学童を受け持った学生が、急性疾患に比べて多種類の技術を体験していることなどを明らかにし、偏りに対する対策として、演習や実習直前オリエンテーションでの経験の機会の提供、実習指導者と教員との調整、実習内容や施設そのものの検討の必要性を提起した。
大見ら	小児看護学領域における外来看護についての大学教育の現状	看護研究, 40(4), 85-92, 2007.	量的研究：質問紙調査	128件の各大学代表者からの回答より、小児看護学全体の実習日数は平均11.4日、小児外来実習実施大学は35.9%(実習日数は0.5日～2日)、見学が42.9%、見学と看護の実践は50.0%であった。外来実習の有無は、大学の背景による有意差が認められなかったが、講義の有無は、常勤教員の人数、総講義時間数において有意差があった。小児看護の場の拡大と、外来実習の重要性について言及していた。
長谷川ら	小児科外来実習からの学生の学び	岐阜県看護大学紀要, 8(1), 11-18, 2007.	質的研究：実習記録を分析	20名の実習記録から学びに関する303のデータを抽出し、6カテゴリに分類した。外来受付から会計終了まで子どもと家族に付き添い、その後、専門外来実習を行った。1日間であっても学びが深められていたが、安全への配慮やトリアージに関する記述がなく、看護師の判断が学生に伝わるよう、健康に育つための支援も目を向けられるよう、看護師との調整やオリエンテーションの改善を行うことが課題である。
佐藤ら	療育施設見学実習における学生の学び—実習レポートの分析から—	日本看護学会論文集, 小児看護, 38, 164-166, 2007.	質的研究：学生のレポートを分析	61名のレポートから得られた441記述を5カテゴリに分類した。1日間1組の親子を受け持つ実習において、対象の理解と援助のあり方を学生が学んでいたことを報告し、関係職種との連携における看護者の役割について、学びを深められるような指導の検討が課題であるとした。
永島ら	子ども看護実習における重症心身障害児施設実習の意義—実習での学生の学びから—	近代姫路大学看護学部紀要, 3, 51-56, 2010.	質的研究：実習記録を分析	21名の記録から、学びに関する7カテゴリと30のサブカテゴリを抽出し、重症心身障害児の看護の目標である①生命の維持②発達の促進③障害の克服④QOLの向上に、学生の学びが該当していたことなどから、重症心身障害児施設で子どもを受け持つ形態の実習は、わずか1日間ではあるが、意義があったと報告していた。

アルは学生のinteresting、engaging、valuableの3項目で有意な評価を示したことを明らかにした。

一方、岩田ら（2010）はPBLチュートリアルは学習効果があるとした反面、グループワークの時間が不十分であると効果が得にくいとの結果も示した。

2. 小児看護学の演習について

小児看護技術の演習では、小児看護の対象である子どものイメージを理解すること、具体的な小児看護技術の修得のために、ロールプレイ、模擬患者、シミュレーションを活用した方法が行われていた。ロールプレイでは、学生自身が演習計画の立案、計画表の作成、演習を行う学生主体の方法（松井ら、2008；松井，2010）、はじめに教員主体で技術演習を行い、その後、学生自身が看護援助を考えロールプレイを行う方法（谷口，2010）、教員主体で技術演習を設定する方法（野口，2007）が報告された。学生同士がロールプレイを行うことによって、具体的な看護援助の学びがあった（谷口ら，2010）、子どものイメージ化が図られ実習で「子どもとの接触」や「子どもや家族とのコミュニケーション」につながった（松井，2010）との効果が報告された。しかし、学生の技術の習得は、子どものイメージ化にとどまり、実践的な技術では「バイタルサイン測定」以外は期待された効果がなかった（松井，2010）、学生間のロールプレイでは子どもに接した経験の少ない学生が子どもを演じることに限界があり、子どものイメージ化が難しい（谷口ら，2010）との課題も挙げられた。

兒玉ら（2009）は、親役の模擬患者（模擬患者を養成する施設に所属し、講習等を受け、他の大学や専門学校においても専門的に活動を行っているメンバー）を活用した学生全員が体験できるコミュニケーション技術演習を報告している。一人ひとりが体験することで、コミュニケーションの難しさを再認識できた、フィードバックによる自分への気づき、緊張する体験、他の学生を注意深く見ることでの学びがあった反面、実習への不安、時間の問題、場面設定の問題を指摘した。

Kaplanら（2011）は、学士課程の学生にPediatric Mock Code（シナリオによる小児のシミュレータを用いた蘇生）の演習を行い、リアルな体験が知識や臨床で機能する能力を増加させること、シミュレーションによる蘇生の経験が学生の自信を増加させることを報告した。

3. 小児看護学の実習について

1) 学生と子ども・家族との関係形成について

藤田ら（2010）は、受け持ちの子どもや家族との心理的距離が接近した学生は、家族との関わり時間が長く、楽しく実習に取り組める傾向にあったことを報告していた。加藤ら（2010）は、看護専門領域別の実習に関する研究動向を分析し、小児看護学の領域では、他領域よりも「教員」という単語が多く抽出され、学生が子どもの理解や家族との関係構築をするために教員や他者のサポートを必要としていることを示唆した。小代ら（2009）は、子どもとの人間関係の形成にむけて一歩踏み出すための影響因子として、医療者によるタイムリーな助言や助けは援護感となり、子どもとの関わり行動へと向かわせていたことを明らかにした。一方で、保育所実習が1週間の期間に23～25施設で行われており、具体的な学生の体験に教員が寄り添えない現状が報告されていた（糸井ら，2010）。

2) 子どもの権利と倫理に関する教育について

山下（2010）は、採血場面で母親の付添が許されなかった場面を通しての倫理に関する教育実践を報告した中で、臨床実習の場は学生が状況の中に浸ることができ、疑問を持ちやすい環境にあり、その学生が感じた疑問を倫理教育のテーマにする意義は大きいとした。さらに、学生が能動的に思考し行動するという検討のプロセスでは、ファシリテーターの役割が非常に重要であると述べていた。丸山（2008）は、看護学生が捉える「入院中の子どもを尊重した関わり」について分析した。実習中に学生が経験した子どもが尊重されていない関わりとして、【説明を十分に行っていない】【処置時の声掛けがない】【処置時に身体を押さえつける】を抽出し、

子どもの気持ちを大切にすることと、子どもの安全への配慮や治療を確実に行うことの間葛藤が生じていることを報告した。どのように援助することが子どもにとって最善なのかということについて、学生が思いや考えを整理できるように場面の振り返りなど援助していく必要があるとした。さらに子どもが年少の場合、子どもの反応の読み取りに困難を感じている場合があり、その判断をサポートする必要があることを指摘した。今野ら(2011)は、プレパレーションが十分になされていない現実に学生が遭遇し、時に後退する学生のプレパレーションの認識を実習後に「子どもの権利」の点から再考できる学習機会を設けることが、学生の倫理的な感受性を育む一助になるのではないかと述べた。

3) 援助技術の経験について

小迫ら(2008)は、「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準」(厚生労働省, 2003)をもとに、実習施設の特徴や実習方法を考慮し改変した「小児看護技術経験表」を用いて調査を行った。症状管理や治療に関連した項目は、学生が受け持った子どもの状態や治療内容によって見学・実施できる項目が左右され、特に身体侵襲を伴う看護援助については、実施・見学とも機会がなかった項目が多いことを報告した。さらに、学童より、乳幼児を受け持つ方がより多く技術体験ができたこと(高尾ら, 2010)、急性疾患の子どもより慢性疾患の子どもを受け持った学生の方が、より多くの種類の技術を経験していること(松田ら, 2010)などから、経験できる技術は受け持ちの子どもの発達段階や病状の経過によって、影響を受けることが明らかとなった。

4) 病棟以外での実習について

小児病棟以外の実習場所では、外来、保育園、療育施設、重症心身障害児施設等があった。

大見ら(2007)は外来看護実習の大学教育の現状について調査し、小児看護学全体の実習日数は平均11.4日で、外来看護実習を実施している大学は35.9%であると報告した。長谷川ら(2007)は、感染症を含む多様な疾患で受診する子どもがいる待合環境、

安全への配慮やトリアージにかかわる学生の学びの記述がみられなかったことから、外来実習における課題として、看護師の判断が学生に伝わるように、事前に看護師と調整をする必要があること、講義内容の検討と学生が講義での学びを想起できるように実習オリエンテーションを改善する必要性について言及した。

保育園実習では、糸井ら(2010)は、学生たちは成長発達の視点では十分に理解を深めていたが、保育園の子育て支援の役割、家族への関わり視点への気づきは少なく、学びを広げるためには、学生個々の気づきや学びを共有するための学生間の討議の機会を設けることが必要であるとした。

佐藤ら(2007)は療育施設、永島ら(2010)は重症心身障害児施設での1日間の実習における学生の学びを実習記録から分析した。療育施設では【障害児の理解と対応】【家族の心理の理解と対応】【療育施設の役割と機能】【保健医療福祉チームの連携】などの学びがあったこと、重症心身障害児施設では【重症心身障害児への看護のあり方】【重症心身障害児に必要な看護援助の方法】【重症心身障害児の理解】【重症心身障害児の家族の理解】【重症心身障害児施設の役割と機能】【学生が体験した子どもへの援助】【自己の課題】の学びがあり、たとえ1日間の実習であっても、意義があったこと報告した。

今後、小児看護の場は医療施設から地域へと広がっていくことが予想され、より現状に即した小児看護学実習を検討していく必要性が示唆された。

V. 考 察

小児看護学教育の実践の効果については多数報告されていたが、研究は1つの大学や専門学校を対象としたものが大半であった。結果は、実習病棟や学生の特性、教育的背景の影響を受けていることが考えられるため、Parkerら(2011)も述べているように、さまざまな教育課程、教育内容による検証の蓄積が必要であると考えられる。

本邦における教育の評価は、比較する対象を設定

しない学生の自己評価やレポート、大学独自の「看護技術経験表」を分析対象としたものが大半であり、学生の主観的な評価の結果から示しているため、一般化には限界がある。今後は、学生の問題解決能力や実践能力などを客観的に評価するための方法や測定用具、評価基準を検討していく必要がある。

小児看護学の講義では、IBLやPBLチュートリアルなど学生自らが課題を見つけ、問題解決のために主体的に学習をすすめる方法は効果的であるとしたものの、チューターの役割やグループ学習時間などその実施方法に依るところが大きいことも明らかになった。小児看護学の演習では、学生が主体となり演習を計画・実施する取り組みが報告され、効果がある一方で技術の修得や子どものイメージ化の難しさが課題に挙げられていた。講義や演習にIBLやPBLチュートリアル、グループワーク、ディスカッションなどを取り入れることは、学生の自主性や主体性を促し、理解を深めるために非常に有効な方法であることが示唆された。しかし、学生にただグループワークをさせているだけでは、十分な効果を得られないことも明らかになった。例えばハワイ大学では、講義と演習や臨床実習が1セットとして同時進行で組み立てられており、講義で知識を獲得し、それを臨床の場で体験を通して活用し、また逆に臨床で体験したことを教室の学習で確認できるといった一連の教授方法を行っている（塚本，2000）。このような知識と実践の試行錯誤を通して、学生は主体的学習態度やリサーチ技能、思考力、臨床判断力を養っていくことが推察される。厚生労働省（2011）は、「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」の中で、「学生は、臨地実習において講義や演習で学んだ知識を統合して個別の対象者に合わせて看護を提供できるようになることが期待されている。そのため、演習で判断する能力を身につけ、臨地実習において実際の看護実践のダイナミズムの中で体験して学んだ看護を基に、更に必要な知識を学ぶというような繰り返しの学習方法が必要である。このような学習方法を通して、保健師・助産師・看護師として活動する様々な場において、対象者の健康の状

態や生活の状況に応じた看護が実践できる能力が育成される。」（p.12）としている。単独ではなく、講義・演習・実習の一連の流れの中で、学生が自分で考え判断し行動に移していけるような教育方法の工夫が求められる。高瀬ら（2011）は、実践能力とは、単に個々の技術をこなすことによって評価されるのではなく、その実践に関与した思考や判断、態度などのすべての要素を考慮すべきとしており、さらに、実践能力の評価方法の検討も喫緊の課題である。

実習における子どもへの看護実践については、身体侵襲を伴う看護援助の実施や見学の際は、一人の子どもを受け持つことだけにとらわれずに、担当看護師について複数の子どものケアを見学すること、NICUや外来における実習を行うこと（小迫ら，2008）、他の学生が実施する看護ケアと一緒に体験すること（野田ら，2010）等、さまざまな形態を取り入れることも今後検討していく必要がある。一方で、山下（2011）は、看護学実習には目標の二重構造が存在し、学生は看護目標達成に向かいながら、自身の実習目標達成を目指す存在であることを指摘している。実習目標達成のために看護技術項目の実践を重視する経験主義的な実習にならない様に、子どもや家族にとっての援助の意味、ニーズにあったケアを考えさせる機会をもつことも重要である。

わが国においては、臨地実習施設との調整が難しく、ほとんどの学校で講義が全て終了したあとに一斉に実習が行われている。このような現状のなか、講義と演習の連関性をもたせることや臨床に近い形での演習方法、時期、回数を考慮し、実習で効果が最大になるような演習を工夫する必要がある。また、実習では知識と実践を連動させながら学ぶことができるように、場面を振り返る機会を多くしたり、実習後に再度、知識を深める時間を確保することも必要である。さらに、教員が専門分野の最新の知識や技術を保持しておくために定期的に臨床実践を経験できる機会をつくることなども考えていく必要がある。

また、学生が子どもと家族の関係性を構築するためや学内での学びと臨床での現実とのギャップを埋

めるためには、実習指導者・教員の資質向上とともに、お互いの連携協力関係の強化にも取り組む必要がある。学生と教員・実習指導者との関わりが重要である一方で、多様化する実習場所に伴う複数の教員配置の難しさや一人の教員が複数の施設を受け持つという課題も浮き彫りになっている。限られた実習期間、人的資源等の中で、効率的に小児看護の学びに繋げ、社会が求めている看護実践能力を獲得し得る教育方策の探究が今後も必要である。

VI. おわりに

小児看護学教育に関する先行研究を概観することで、小児看護学教育の実践方法と課題が明らかになった。発達段階に応じた子どもの理解や子どもと家族が自己決定できるような援助といった小児看護学領域の問題解決能力や実践能力を高めるための教育実践の蓄積と評価を、さらにすすめる必要がある。

文 献

飯村直子, 小山内佐斗子, 松尾ひとみ, 山村美枝, 佐藤奈々子, 筒井真優美, 中野綾美, 込山洋美 (1998): 看護系大学の教育理念と小児看護学の学習目標. *Quality Nursing*, 4 (5), 49-53.

小迫幸恵, 森田秀子, 塩川朋子 (2008): 小児看護学実習における看護技術経験の現状と課題. 山口県立大学看護栄養学部紀要, 創刊号, 28-38.

厚生労働省 (2003): 看護基礎教育における技術教

育のあり方に関する研究会報告書. 2013.1.7, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html>

厚生労働省 (2011): 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書.2013.1.7, <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf>

野田智子, 柴崎由佳 (2010): 小児看護学領域における基礎看護技術教育の現状と課題—技術項目到達度の分析から—. 群馬パース大学紀要, 10, 83-91.

Parker RA., McNeill JA., Pelayo LW., Goei KA., Howard J., Gunter MD. (2011): Pediatric clinical simulation: a pilot project. *J Nurs Educ*, 50 (2), 105-111.

松浦和代 (2012): e-ラーニング—小児看護の基礎教育と新人研修の活性化と実質化のために—. *小児看護*, 35 (4), 510-513, へるす出版, 東京.

溝上慎一 (2010): 概説アクティブ・ラーニングとは. *Kawaijuku Guideline*, 44-51.

高瀬美由紀, 寺岡幸子, 宮腰由紀子, 川田綾子 (2011): 看護実践能力に関する概念分析: 国外文献のレビューを通して. *日本看護研究学会雑誌*, 34 (4), 103-107.

塚本恵 (2000): 実践を重視したハワイ大学の看護教育. *沖縄看護大学紀要*, 1, 46-52.

山下暢子 (2011): 実習目標達成に向けた学生の理解と支援. *看護教育学研究*, 20 (2), 4-5.